

骨粗鬆症リエゾンサービス

わが国で 2007 年に生まれた子供の半数が 107 歳より長く生きると推計されている。一昨年、政府に「人生 100 年時代構想会議」が設置され、人生 100 年時代を見据えた取り組みが始められている。日本の多くの高齢者は「長く」生きることよりも、「健康に」生きたいという思いが強い。本誌の読者は、骨折予防が健康寿命延伸のために重要であることは十分に理解していると思われる。しかしながら、社会全体で高齢者骨折の予防の重要性が共有されているとは思われない。それは骨粗鬆症治療が患者全体の 30% 程度しか実施されていないと考えられることや、治療薬の 1 年後の継続率が 50% 程度まで低下すること、大腿骨近位部骨折の患者の 20% ほどしかその後の骨折予防の治療がなされていないことから推し測ることができる。その原因の一つに「骨折」という疾患に対する認識不足があげられる。

「骨折」とは元気な子供やスポーツ活動での発生頻度が高く、その多くが比較的速やかに治癒し、後遺症なく日常生活やスポーツに復帰する。したがって一般に、「骨折」といえば重篤な疾患ではないと誤解されているふしがある。しかしながら、高齢者の大腿骨近位部骨折や脊椎骨折は移動能力をはじめとする日常生活動作（ADL）を著しく制限する。さらに非骨折例に比較して死亡リスクが、大腿骨近位部骨折を生じた例は 6.7 倍、脊椎骨折を生じた例は 8.6 倍上昇することが知られている。すなわち高齢者に生じたこれらの骨折は、脳卒中と同様に ADL 制限と生命予後の悪化をもたらす。そこで最近、大腿骨近位部骨折や脊椎骨折は単なる骨折ではなく「骨卒中」との名称で呼ばれ、啓発されている。

骨卒中の防止を目的に、骨粗鬆症リエゾンサービス（OLS）が進められている。これは医師以外のメディカルスタッフがコーディネータとなって、脆弱性骨折患者が再び骨折を起こすことの防止や、骨粗鬆症治療の開始率・継続率を改善する取り組みである。このコーディネータは骨粗鬆症マネージャーと呼ばれ、現在、骨卒中予防の中心的動きを担っている。本特集では全国で展開されている OLS の詳細をご紹介します。OLS が高齢者の健康寿命延伸に貢献することを願っている。

（萩野 浩）